

は じ め に



太平洋に臨む苫小牧市は、昭和38年に世界で初めて作られた内陸掘り込み式人造港である国際拠点港湾の「苫小牧港」と北海道の空の玄関口である「新千歳空港」のダブルポートを擁し、北海道経済発展の大きな役割を担う産業拠点都市として発展を続けています。また、樽前山麓の広大な森林や、ラムサール条約湿地に指定されるウトナイ湖など、豊かな環境が整う自然と調和した快適な生活環境の中で、共に生き生きと心豊かに暮らしながら、全ての市民が協働で社会に貢献し、未来に向かって挑戦し続けるまち「人間環境都市」の実現を目指してまちづくりを進めています。こうした理念の下、持続可能な循環型社会を構築すると共に、これまでの「大量生産・大量消費・大量廃棄」社会からの転換を図り、さらなるごみの減量と資源の有効活用を促進し、環境保全及び自然保護等も考慮した、総合的視点からの取組が求められています。

これまでに、国では平成30年6月に「第四次循環型社会形成推進基本計画」、「地域循環共生圏形成による地域活性化」、「ライフサイクル全体での徹底的な資源循環」、「適正処理の更なる推進と環境再生」などの重要な方向性を掲げるとともに、一般廃棄物の減量化や適正処理の推進等に関する新たな目標を設定しました。また、北海道は、令和2年3月に「北海道循環型社会形成推進基本計画（第2次）」及び「北海道廃棄物処理計画（第5次）」を策定し、循環型社会の形成に関する施策の基本方針や数値目標を定めました。近年は、地球温暖化に起因する気候変動問題に対し、温暖化抑制に関する意識の高まりから、令和3年10月には地球温暖化対策計画の改定が閣議決定され、2030年度において、温室効果ガス46%の削減（2013年度比）を目指すこと、さらに50%の高みに向けて挑戦を続けることを表明しました。

本市においては、平成22年度から令和6年度までを計画期間とする「苫小牧市一般廃棄物処理基本計画」を策定し、「053（ゼロごみ）のまち とまこまい」を基本理念に掲げ、取組を進めてまいりました。その後、同計画を令和3年3月に改定し、後期計画として、4R推進によるごみの減量や市民との情報共有と環境教育の推進、環境負荷の軽減を目指す効率的なごみ処理事業の推進など様々な取組を行ってきました。令和3年8月には、2050年までに二酸化炭素の実質排出量ゼロを目指す「ゼロカーボンシティ」への挑戦を宣言しました。今後のごみ行政を推進する上では、これらの社会情勢に対応し、循環型社会、脱炭素社会及び自然共生社会へ向けた総合的な取組を進めていく必要があります。

令和4年度の家庭ごみ1人1日当たりの排出量は、前年度の564gから552gと減少しました。引き続き、「053（ゼロごみ）のまち とまこまい」、「ゼロカーボンシティ」の実現に向けて、市民、事業者、行政が一丸となった取組を進めてまいります。

今後も皆さまの一層のご理解とご協力を心からお願い申し上げますと共に、ここに本市清掃事業の概要を収録いたしましたので、参考資料としてご活用いただければ幸いです。

令和5年12月

苫小牧市長 岩 倉 博 文